# IBDと就労

## 第8回　IBD患者の災害時の心構え

中山泰男

なかやまやすお●1964年生

17歳でクローン病を発症。小腸機能障害1種1級。2001年に熊本IBDを設立。九州IBDフォーラム代表。熊本IBD会長。IBDネットワーク社会制度支援世話人主担当に就任し就労問題を中心に活動を行っている。現在は、養護老人ホームの施設長として勤務。趣味は、ツーリングと他県の患者会めぐり。熊本県難病団体連絡協議会事務局。日本難病・疾病団体協議会評議員。


東日本大震災が起きた夜、被災地に住む患者仲間と連絡が取れずにとても心配した。3日後、やっと電話がつながり安堵したのも束の間、テレビでは放送されない想像を超えた生々しい情報に私の心は打ち砕かれてしまった。あれから数ヵ月、国民総出の支援と住民の皆様の復興への努力に対し、心からの感謝と敬服の念を抱いている。

4月の中頃のこと。私の地元、熊本県の患者さんに震災による影響をたずねてみた。彼は建設会社の下請けに勤める技術者である。仕事の依頼はあるのだが建築資材が手に入らず、実際には作業が止まってしまい収入がないと嘆いていた。近所のDIYショップでも、大工さん同士がコンパネ数枚の取り合いで喧嘩をしていたというから建築資材不足も深刻なようだ。

4月末に彼から連絡があり、知り合いから関東・東北に行けば仕事があると聞いたようで、とりあえず行ってみるという。若い彼の考えがあまりにも安易に思えた私は、「ちょっと待て、もう少し考えてからでも良くないかな」と、もう一度考え直すよう試みたのだが、保育園に入園したてのお子さんを抱えており、切羽詰った心のうちも理解できた。



結局、彼の決断は変わることなく、とにかく体調管理にだけは努めるようにと、伝えるのが精一杯であった。時を同じくして、関東で建設業に勤めている私の親戚から、放射能が怖いので熊本に戻りたいと電話があった。建設業ならそっち（熊本）でも何か仕事があるだろうと、いとも簡単に言うではないか。大震災以降、多くの方々の感動に値する姿の陰に、ほんの一部ではあるが、あまりにも身勝手な人たちの言動に耐えかねていた私は、瞬時に沸点に達し「仕事をなめんじゃない。こっちだって大変なんだ！」と怒鳴りつけてしまった。

宮城県の友人の情報によると、ほとんどの方が仕事もなく、明日への不安を抱え、それでもなんとかみんな頑張っている。「自分はたまたま復興に関わる仕事につけ、休憩どころか終りの区切りもなく、朝から晩までひたすら復興作業を続けているが、それでも仕事があって良かった」と話してくれた。状況が落ち着くまで、お子さんを預かりましょうか、と申し出ると「いや、こんな時だからこそ家族一緒がいいんですよ」と笑って返された。今日を生き抜くには、生活費を稼がなければならない。健康な人も病気の人も非常時には関係ないのだ、と改めて考えさせられた。

ある患者団体では、非常時専用の携帯メーリングリストを登録しているところもあるそうだが、今回のことで、通信機器が一切使えない状況に、一人ひとりの状況を把握することが、非常に困難であることを強く認識した。

TVのコメンテーターが「非常時に人が生き残るためには、なにより普段の人間関係が大切なんだ」と述べていたが、正にその通りだと思う。IBD患者の場合、他の障害者に比べ、移動行為や意思表示に支障がない方が多いので災害弱者の概念には、そのまま当てはまることはないだろう。そうなると、「自分のことは自分でやる」という姿勢が基本となる。与えてくれるのを待つのではなく、自分で調べ行動し、非常時に備えること。これは、普段からの病気に対する心構え、職場・学校・地域との付き合い方、病院とのかかわり方、家族・友人・患者仲間との関係など、社会生活全般に通じるものである。

このような時だからこそ、今一度自分自身と向き合い、人生を見つめ直すことが必要であろう。